

Jan 22 / 0003 / 2

Asahi Weekly, Sunday, January 21, 1990

人種差別反対 の叫び

VOICES OF
SARAFINA!

何と楽しく何と悲しい映画なのか。ここに登場する少年少女の明るさには逆に涙をさそわれてしまう。この作品は、ブロードウェイで話題を呼んだ南アフリカ製ミュージカル『サラフィナ!』の名場面と練習風景とスタッフ、キャストのインタビュー(シナリオ収録部)から成るドキュメンタリー映画だ。南アといえばアパルトヘイト問題に尽きるが、ここでは政府による“人種差別”を直接非難するのではなく、若者の陽気な歌と踊りと母国を愛する生の声を通して感動的なメッセージを送っている。

南アを舞台にした映画といえば、先々週号の英文評で紹介した『白く渴いた季節』/The Dry White Season』や『遠い夜明け』/Cry Freedom』、『ワールド・アパルト』/World Apart』などがあるが、どれもハリウッド・スターが主演しているため、ある意味でアウトサイダーによる糾弾という感がしないではない。しかし今回の作品は、南アで生まれ育ち、南アの現状をじかに体験し、現時点でも政府による弾圧に苦しめられている若者が出演しているという点に意味がある。彼らは決して暗い表情を見せない。なのに、彼らのメッセージは強烈なインパクトがある。『サラフィナ!』がブロードウェイの舞台でセンセーションを巻き起こし、この映画がカンヌ映画祭で絶賛を浴びたのは、最初書いたように、希望に満ちた未来を求めようという(アパルトヘイトの被害者である)少年少女の素直な姿勢があふれ出ているからだだろう。

ミュージカル『サラフィナ!』について少し説明しておこう。物語は、1976年に黒人居住区ソウェトで起こった大暴動のきっかけとなった高校を舞台に、自分たちの国の歴史を考えるサラフィナという少女が、獄中で拷問を受けて戻ってきたあと、仲間とともにミュージカルを上演。ネルソン・マンデラ(反政府運動家)が解放される日に歌われるであろう歌で劇を締めくくるといふ感動的な話だ。なお、ミュージカル『サラフィナ!』はこの映画公開後の3月東京でも上演される予定。(ヘラルド・エース、日本ヘラルド映画配給。上映時間1時間24分。2月上旬より、東京・パルコスペースバート3にて公開)

Mbongeni Negma: Theater in South Africa at the moment plays a very important role because—again—we don't read a lot in the newspapers about what is happening in South Africa—inside South Africa the newspapers cannot report everything they want to report. So theater, at this point in time, has become the only voice left.

Negma: I want this word to live with you forever—what I'm going to say to you now. And I want it to be engraved in your memory. Meaning—we are not doing this show simply because you're just a bunch of savages or barbarians who know nothing about your own lives—you understand? If that is the point then there's no reason for you to be in this show. The South African embassy has ambassadors here. Ambassadors are people who speak for them. The black people in South Africa don't have an embassy here, they don't have ambassadors, so you are their ambassadors, this is the embassy and you are their ambassadors. Okay, so if you say you don't know anything, what kind of an ambassador are you?

Girl 1: My father used to, when we were eating supper at home, talk to us and tell us everything about South Africa—what is happening and tell us to keep quiet, not to talk. He only used to tell us to know the truth about South Africa and what is happening—that's all he told us.

Girl 2: Like my brother... they used to take him from home. These two policemen came in the middle

of the night looking for my brother and then they took him, they took him to jail and beat him. I remember last year, they shot him two times, two bullets, one here and one here. They thought he was dead, but they just left him like that and then he came home later in the morning covered with blood. And then he told my mother and my father that the police had shot him.

Boy 1: Me, I feel the pain from when I've been detained at home. For my rights and for my country, I feel the pain.

Boy 2: In South Africa, if you're detained, you either can be tortured, which is very normal, so that they get some truth out of you or they just scare you so that you are never involved again. If you are not killed, if you survive all that, then they might try to turn you into being an informer, a spy for the government.

Boy 3: Yes, I'll go back to South Africa, I have to go back to South Africa because it's where I belong. It's my home. Yeah, I'll die in South Africa, that's what I think.

Girl 3: South Africa is nice because it's my place.

Boy 4: South Africa is my motherland, it's my home, it's where I was born. Even though I've never travelled to a lot of countries, ... it's the only place I've felt really grateful to be there. I dream about Africa. I dream about my brothers and sisters. Those who are dead and those who are alive, and those who are behind bars. And those who are still praying that one day South Africa will be an African country. That's what I dream about Africa.

●**Mbongeni Negma** ミュージカル『サラフィナ!』並びに日本でも上演されて話題になった『アシナマリ!』の作者でもある黒人新進劇作家
●**to be engraved** 刻み込まれる
●**savages of barbarians** savageもbarbarianも意味は同じ。これらを重ねることによって「野蛮人」という意味が強調される
●**here** 『サラフィナ!』が上演されているアメリカを指す
●**the black people...here** 在米南ア大使館は、南アの白人政府を代表するもので、

黒人の意見を反映していないという主張に基づいた発言
●**to keep quiet, not to talk** 南アに住む黒人の多くは、白人による迫害を恐れ、現状に対する不満を押し隠すことを余儀なくされている
●**I've been detained** 拘置された
●**informer** 密告者
●**behind bars** 「実刑に服して」。barsは監獄の“おり”のこと
★全体的にかなり崩れた口調なので、一般の英文法から考えるとおかしい箇所があることに留意。

砂上樓閣の太陽都市

アパルトヘイトは、異人種婚姻禁止法など80ほどの法律によって、経済的、社会的に白人の特権を維持するように作られている。この中核を成すものが、バンツナー・ホームランドだ。黒人を部族ごとに10の自治区に押し込んだのである。これは国土の15%に過ぎず、しかも荒地。結果的にはこのホームランドから白人居住区へ出稼ぎに来る形になる。

少数白人支配に対して国際世論の非難が高まると、この自治区を“独立”させた。1976年、トランスカイ。77年、ボプタツワナ。79年、ベンゲ。81年、シスカイ……。この独立は、南ア政府以外どこも承認しておらず、国連はそれを無効としている。

この独立を承認させるべく、南ア政府が探っている戦略が、ボプタツワナに作った高級リゾート地サン・シティで、世界的イベントを組むことである。カジノ、ボルノ劇場、デイスコ、ホテルなど、ラスベガスに似たレジャー施設の中心に大劇場“スーパーボウル”を置いている。オープンしたのは81年。このコケ落しにはフランク・シナトラが出演した。

問題はアフリカの最南端

アフリカと言っても広い。自然もちがえば国情も異なる。眠っている国と富んでいる国がある。鉄が多く、石油輸出国として裕福だったナイジェリアは、原油の値下がりによって経済的に破綻、治安も乱れている。ここから反体制派に乗りだし、トップ・スターのフェラ・アニクラボ・クティを逮捕し、懲役5年を宣告した。

もうひとつの富める国が、南アフリカ共和国だ。アフリカ大陸の南端に位置し、日本の約3.2倍の面積がある。1961年に英連邦から脱退し、南アフリカ共和国となる。人口3200万人。首都プレトリア。

問題はこの人口のうち、たった15%の白人が“国家”を支配し、2300万人の黒人、280万人のカラード(混血)、90万人のインド系を差別していることだ。元来、この地は、ズールー族、ツワナ族、コーサ族、ベンゲ族など黒人の居住地であった。ここに17世紀、新天地

英7 NO.20

"Sun City"の
レコードジャケット

世界的に孤立している南アだけに、呈示するギャラは破格である。このギャラに釣られて多くのミュージシャンが出演した。ピーチ・ボーイズ、グレン・キャンベル、リンダ・ロンシュタット、ロッド・スチュワート、オリビア・ニュートン・ジョン、クイーン……。60年代ラディカル派の象徴とされていたシカゴも、84年の日本公演直後、サン・シティへ向かった。その記者会見で、ぼくがぶつけた質問にこう言い放ったものだ。

「南ア公演に反対する勢力があることは知っている。でも、それは外部の人たちがやっていることだ。ぼくらはボプタツワナへ行って実際にどういう状況か見る必要がある。ぼくらはどっちにしろ、政治に関与するのは嫌いだ。スポーツや音楽は政治に無関係であるべきだと思っている。」

別に、国連は公演を禁止してないよ」

を夢見たオランダ人の新教徒(ボーア人)が移民してきた。この人々はこの地を開墾し、ズールー族と戦って国家を築いて行った。丁度英国のWASPがアメリカ大陸でインディアン

の土地を収奪して行ったように。南アフリカで3世紀にわたって生きてきたオランダ系白人は、自らを“アフリカーナ”と呼び、公用語も“アフリカーンス”に定めた。だが、1870年代、アフリカ南部(現南ア、ジンバブエ、ザンビア、南西アフリカなど)でダイヤモンドが発見されて以来、カリフォルニアのゴールド・ラッシュよりも異常なダイヤ・ラッシュとなった。世界中のヤマ師が殺到し、ダイヤ、金、プラチナなどの鉱山を掘り起こす。この利権を狙う英国とアフリカーナとの戦い。“南ア連邦”から“南アフリカ共和国”となったのは、英国からの独立であり、アフリカーナの民族自決であった。同時に、彼らは黒人を徹底的に差別する方法を選んだ。これが南アのアパルトヘイト(人種隔離)政策である。



ミュージカル『サラフィナ!』は、ブロードウェイで絶賛を博した

ムボンゲニ・ンゲマ:今のところ、南アフリカでは劇場は非常に重要な役割をしています。なぜなら…新聞には南アの現状があまり書かれていないからです。南ア国内では新聞が報道したいことをすべて報道することができません。そこで劇場…現時点では、劇場が唯一残された発言の場になっているのです。

(中 略)

ンゲマ:(俳優たちに)君らにはずっとこの言葉を覚えてもらいたいのだ。私がこれから話すこと。私の言うことを君らの記憶の中に刻み込んでおいてほしい。それは…我々がこのミュージカルを上演するのは、我々が自分の生き方も知らぬ野蛮人じゃないからだ。分かるか? でなきゃ、君たちがこのショーに出演する理由はないわけだ。南アフリカはこの国に大使を送っている。大使とは国民を代表する人のことだ。つまり、南アの黒人はこの国に大使館を持っていない。大使もいない。だから君たちが南アの黒人の大使になるのだ。これが大使館で、君らが彼らの大使だ。何にも知らないと言うやつは、大使にはなれない。



「警察に捕まっても笑ってやりすすしかない」とギヤストのひとり

少女1:父さんはよく…家族そろって夕食をとっているときに南アフリカに関するありとあらゆることを…何が起きているかをあたしたちに話してくれました。だけど、黙ってろって言ったものです。父さんは南アフリカの実情と今起きていることをあたしたちに知らせるために話してくれたんです。それだけです、父さんから聞いた話。

(中 略)

少女2:兄さんのことだけど…あいつらは兄さんを家から連れて出したんです。真夜中にふたりの警官が押し入って来て、兄さんを捜して、それからあいつら、彼を連れ出して監獄に入れ、殴りつけました。去年のことですが、兄さんは2発も銃で撃たれたんです。弾を2発、こことここに、あいつら、兄さんが死んだと思って置き去りにしたんです。朝になって兄さんは血だらけで家に帰って来ました。そして、あいつらに撃たれたって母さんと父さんに話したんです。

少年1:僕は、母国で勾(こう)留されると、苦痛を感じる。僕自身の権利と国のことを思って苦痛を感じるんだ。

少年2:南アフリカで、勾留されるってことは、拷問を受けるか…これはよくあることさ。あいつら、本当のところを知りたくて拷問するんだ…あるいは、二度とかかわり合いにならないように、脅しをかけてくるのさ。たとえ殺されなくて生き延びても、密告者、政府のスパイに仕立て上げられてしまうかもしれない。

(中 略)

少年3:そうだな、僕は南アフリカに戻るよ。戻らなければならぬ。だって、そこが僕の居場所なんだから。僕の国なんだ。ああ、南アフリカで死ぬのさ。そう思ってるよ。

少女3:南アフリカはいいところよ。だってあたしの国なんだもの。

少年4:南アフリカは僕の祖国さ。そこで生まれたんだから、僕の国だ。あまりほかの国に行ったことがないけれど…南アはそこにいることを心からありがたく思う唯一の場所さ。アフリカの夢を見るんだ。兄弟や姉妹の夢。死んだ人や生きてる人や監獄にぶち込まれた人々。それからいつの日か南アフリカがアフリカの国になるよう祈っている人々の夢も。それが僕を見るアフリカの夢さ。

4 南アフリカ社会のしくみ

南ア共和国の白人を除く三種（カラード、インド人、アフリカー人）のうち、カラード、インド人は現在、人種別三院制議会の発足によって白人側に取りこまれ、残りのアフリカー人は、一九五九年の「パンツァー自治促進法」にもとづく分離発展政策により、全国土の一三%にあたる地域に、部族別の一〇%のホーム

ムランドに分けられ押しこめられている。南ア政府は各ホームランドに対し、初めの段階では限定付きの自治を与え、ついで七〇年の「パンツァー・ホームランド市民権法」によりアフリカー人の南ア市民権を剥奪し、翌七一年の「パンツァー・ホームランド制憲法」によって各ホームランドごとに憲法を制定して「独

立」を付与するという政策を採っている。その結果、現在までトランスカイ、ベンタ、ボタツワナ、シスカイの四つが「独立」した。南アフリカ政府はこれによって国際社会のアパルト（アイト）非難をかわそうとしているが、国際社会はその「独立」を認めていない。理由は明らかで、人口の七二%（一九八五年現在）を占めるアフリカー人がわずか一三%の土地しか与えられず、そのうちホームムランドは白人地域に比べ地味も悪く、鉱産物資源もほとんどない。工業は未発達である。したがってホームムランドの財政は六〇・八%を南ア政府の補助金に依存しているのが現状である。

このため、ホームムランドのアフリカー人口の約半数はたえず白人地域に極端に低廉な出稼労働者として流出し、白人地域で得た賃金をきりつめてホームムランドに送金している。そしてその送金はホームムランド内で細々と農業を営む妻子の家計を補填している。

一方、白人側はアフリカー人を労働力として必要としており、一定数のアフリカー人が白人地域に在ることは認めざるをえないが、それ以外のアフリカー人は出来る限りホームムランドで生活するという分離発展政策をたて、アフリカー人の都市流入に対しては厳しい制限を設けた。いわゆる「流入制限」と呼ばれるもので、全国的に労働者管理局制度を敷き、アフリカー人出稼者はすべてここに登録することが義務づけられ、管理局の指図にしたがって雇用されるという労働力調達機構ができた。

タウンシップはすべて地域行政局（全国に二二局）の管理下に置かれ、出稼者は行政局の建てたマッチ箱のような住宅に家賃を払って住んでいる。八四年九月、ヴァール・トライアンガル・タウンシップで起こったアフリカー人の蜂起の原因の一つはこの家賃値上げへの反対であった。アフリカー人反政府運動の

つぎにアフリカー人がホームムランドを離れ白人地域に在るかぎりつねに身分証明書（パス）を携帯することが義務づけられた（The Native (Abolition of Passes and Coordination of Documents) Act of 1956）。さらにこの身分証明書を持ってい

ても、以下に述べる条件が満たされなければきり七二時間以上白人地域にとどまることができなかった。それは、①出生以来引きつづきタウンシップで生活している者、②同一の雇用主に引きつづき一〇年間か、または一五年以上白人地域で雇用された経験を持つ者、③以上の①②の資格を持つ者の配偶者と、その一八歳以下の未婚の子とも同居している者、④管理局の発行する特別許可を持つ者（Section 10 of Black Urban Areas Consolidation Act of 1945）。この身分証明書は警察官によっていつでも検査され、もし違反していればホームムランドに強制送還されてしまう。

これだけ厳しい規制にもかかわらず、アフリカー人は白人地域に働きに出ざるを得ない。そして出稼者は白人地域では「原住民（都市地域）法」（一九三三年）によって都市周辺の一定地域（タウンシップ）にしか住むことができない。出稼者は昼間はそこから白人の工場に働きに行き、夜間にもどるという制度が確立した。現在これらタウンシップは全国に二〇〇か所以上もあり、南ア最大の産業都市ヨハネスブルグ近郊のソウェトは人口一五〇万とも二〇〇万人ともいわれる最大のタウンシップである。

全国的拡大に対し、政府は八五年七月、非常事態宣言を発令してその弾圧にあたり、同時に、アフリカー人のタウンシップ内での不動産取得を認め、またパス法、流入制限を廃止したが、アパルトヘイトの根幹である分離発展政策は依然維持している。

■静かな深い波紋、国際美術展

反アパルトヘイトの国際的運動のひとつとして、一九八三年のパリを皮切りに世界を巡回してきた「アパルトヘイト否！国際美術展」が一九八八年六月、日本に上陸、九〇年六月まで日本国内三〇〇か所をめぐる、まだアパルトヘイトの名すら知らなかった多くの人に感銘を与えた。

この美術展は、「反アパルトヘイト世界美術家協会」（一九八一年発足。会長はスペインの画家アントニオ・サウラ氏）の呼びかけで寄贈された、八五人の作家の作品一七〇点をもとに、国連の協力で世界各国で開いているものである。

これらの作品の長い旅路の終着駅は、南アフリカ共和国が自由選挙による民主的な政府に生まれかわり、アパルトヘイトが廃止された時に建てられる予定の「反アパルトヘイト美術館」とされている。

日本での美術展は、沖縄から始められ、全国各地で鑑賞した人は、三〇万人近くにのぼった。ほとんどの地域ではアパ

「アパルトヘイトの彼方に人間が輝くー日本人に何かできるか」より
アパルトヘイト廃止をめぐる
南ア人民支援連帯基金
大目書店

ルトヘイトの勉強会、映画「遠い夜明け」の上映と合わせて開催され、草の根のボランティアによる実行委員が緑の下の力ももった。

各地の実行委員会の多くは、初対面の素人衆がつくったが、手弁当で自主的に、運営、展示、宣伝などをやりとげ、ときには、アパルトヘイト問題にふれるのは「政治的だ」とのブレッシヤーがあつたものの、草の根の熱意がそれを超えていった。

この美術展は、人びとの人間性に直接訴えるかたちで、反アパルトヘイトを広める役割を果たしたといえる。

こんな胸を打つ言葉が寄せられている。

●宮崎・小学校四年生「いちばん印象に残ったのは「しろいこうし」という絵です。それは南アフリカ人ばうで、白人が黒人を犬のようにあつかい、白人の力で黒人がとどめられている絵なんだ、ということがすぐわかりました。頭や手や足が、こうしにはまってもがいて苦しんでいるようにうしろに、わたしならぜったいといじめられたいとおもいました」

やさしく美しいひびきを持つ日本巡回専用の特別仕様の特レーラー車「ゆりあ・べむべる」号の名は、宮沢賢治の詩の言葉からとられ、それ自体が目をひくオブジェであった。その側面は、開催地ごとにつくられたワッペンで埋めつくされていた。そして人びとに感銘をあたらせた作品群は、解放の日を夢見てまた世界各国へと旅立っていった。

「ポスト・アパルトヘイト」より

●ライブコンサート
「ビバノ・フリーダム ウェルカム・マンデラ」

会場を埋め尽くした二〇〇〇人を越す人びとが、マンデラが舞台上に姿を現わすやいなや、「ビバノ・マンデラ」「アマンダラ」など、口々に大声援を送った。一〇月二八日夜、日大文学部大講堂で行なわれたコンサートでの盛り上がりが頂点に達した瞬間である。

「ビバノ・フリーダム ウェルカム・マンデラ」と銘打ったライブ・コンサートの前評判は、出演者代表の一人である爆風スランプのサンブラザ中野がテレビの「ニュースステーション」などで宣伝してくれたこともあって、数日前から急速に高まり、事務局では電話が鳴り通しであった。当日会場では、整理券を早めに入れた若者たちが、朝七時頃から並んでいたほどである。午後四時に開門した時は、すでに長蛇の列ができていた。五時半の開演の時には、会場はぎっしり人で埋まり、外にはまだ切符が手に入らなくて、何とか入れないかと待っている人がいた。



マンデラ氏を迎えて。左はサンブラザ中野氏、中央は吉田昌夫

コンサートは、南アフリカでのアパルトヘイト廃絶への闘いの歴史的場面を写したマルチ・スライド上映に始まり、忌野清志郎の弾き語りが続いた。その後出演したミュージシャンは、頭脳警察、かまやつひろし&POW、シーナ&ロケッツ、ハイトイド・ハリス、西尾まさき、ウェストロードと金子マリ、SHIFFEEÐN O STATION、AF、溝口寛之、風スランプなど盛りだくさんで、にぎやかな顔ぶれであった。

「南ア・アパルトヘイト共産国」(吉田仁子著 大目書店)

アパルトヘイトとは何か

1 南アフリカの歩み

オランダ東インド会社が東洋交易の補給基地として一六五二

年ケープタウンに上陸した当時、ケープ海岸部にはすでに良い

歴史をもった先住民がいた。それは、サン族(白人植者の

いうアッシュエン)とコイ族(同ホツチント)で、サレン

族はおもに狩猟と採集によって生活し、コイ族は牛と羊の遊牧

を主業としていた。さらに、ケープタウン背後の高地(ハイフ

エルト)では、バントー語系の農耕・牧畜民ツワナ族、ヌグニ

族、ベンガ族、ツォンガ族が、北方のリンボポ川周辺から南下

してつあつた。

ついでオランダ本国からの移民が始まったが、移民のほと

んどはオランダ改革派教会を信奉する農民(フーア)たちであ

つた。彼らは原住民であるコイ族から土地を略奪し、そのうえ

にはオランダ自由国を建国した。ナタールでは砂糖キビ・アラ

ンチーシヨンはインド人が契約労働者として雇われ、のち定着

した。それに対し、フーア人ナシヨナリスムを主張するJ・B・

ヘルツォークは一四年国民党を結成した。

第一次大戦が起ると、南ア連邦はイギリスに協力してドイツ

領南西アフリカ(現在のナミビア)に進駐し、これによって

戦後の不況期の一九二二年、ランツの鉱山で大争議が起る

ため、白人労働者の支持を失い、一四年に国民党・労働党連立

内閣が成立、ヘルツォーク首相は文明化労働政策のもとに白人

貧困層(フー・ホフイト)の救済・保護を目的に一連の人種差

別法を立法化した。同時に国内産業を保護して工業化がすす

リ、多くの山師たちによる採掘が始まった。やがてセシル・

ロースらのデ・ビース鉱業会社に吸収されていった。

ついで八六年にトランスバール共和国のウイットボト

ル・ランドで金鉱が発見された。金鉱採掘も初めは多くの山師

たちによっておこなわれたが、やがて資本の集中がすすんだ。

を設立し、金採掘に乗り出していった。イギリスはこの産金国

タイヤモンブで金を蓄積したロースも「南アフリカ金鉱会社」

を設立し、金採掘に乗り出していった。イギリスはこの産金国

タイヤモンブで金を蓄積したロースも「南アフリカ金鉱会社」

を設立し、金採掘に乗り出していった。イギリスはこの産金国

タイヤモンブで金を蓄積したロースも「南アフリカ金鉱会社」

を設立し、金採掘に乗り出していった。イギリスはこの産金国

タイヤモンブで金を蓄積したロースも「南アフリカ金鉱会社」

を設立し、金採掘に乗り出していった。イギリスはこの産金国

タイヤモンブで金を蓄積したロースも「南アフリカ金鉱会社」

を設立し、金採掘に乗り出していった。イギリスはこの産金国

タイヤモンブで金を蓄積したロースも「南アフリカ金鉱会社」

を設立し、金採掘に乗り出していった。イギリスはこの産金国

タイヤモンブで金を蓄積したロースも「南アフリカ金鉱会社」

を設立し、金採掘に乗り出していった。イギリスはこの産金国

タイヤモンブで金を蓄積したロースも「南アフリカ金鉱会社」

を設立し、金採掘に乗り出していった。イギリスはこの産金国

タイヤモンブで金を蓄積したロースも「南アフリカ金鉱会社」

アジア経済研究所主任調査員 林 晃史

2 アパルトヘイトの由来と展開

アパルトヘイトとはアフリカーンス語で「隔離」を意味する。

つまり、南アフリカの少数の白人が人口の大多数を占める非白

人(カラード、インド人、アフリカ人)を皮膚の色の違いによ

つて差別していることをいう。このため日本では「人種差別」

と訳されてきたが、最近では地域の隔離によって「人種隔離」

と訳されるようになった。しかし、アパルトヘイトという言葉

は以下に述べるように元来歴史的なタムであると同時に、す

べて立法化され、最近ますます強化されてきたことに注意

すべきである。

アフリカ大陸には白人の人種植民地が多くありながら、南ア

フリカだけでなせアパルトヘイトが起こったのか。その理由は

南アフリカの歴史にある。第一に、フーア人の信奉したオラン

ダ改革派教会の教義によっている。カルバン派の同教会による

と、人は生まれながら神に救われる者と救われざる者との運命

予定の立場をとり、さらにフーア人こそ神に選ばれた者であ

るという「選民思想」にもとづいている。

第二に、アングロ・フーア戦争により農場や家を焼かれ都市

に流入したフーア人貧困層を労働市場でアフリカ人から保護し

法(一五六年)を成立させた。

また最後まで残ったカラードの参政権を奪う「投票者分離代表

法」(一五六年)を成立させた。

人種による職權制限(ジョブ・リザーベーション)を導入した。

に制定された「産業調停法」を改正して人種混合組合を禁止し、

ついでストライク法(一九五四年)を制定していった。

義弾圧法(一九五〇年)などを制定していった。

た「集団地域法」(一九五〇年)、反政府活動を取り締まる「共産主

義弾圧法」(一九五〇年)などを制定していった。

種間の性的交渉を禁止する「背徳法」(一九五〇年)、さらに人種登

録を義務づける「人口登録法」(一九五〇年)、人種別の居住区を定め

し、異人種間の結婚を禁止する「離婚禁止法」(一九五〇年)、異人

種間の性的交渉を禁止する「背徳法」(一九五〇年)、さらに人種登

録を義務づける「人口登録法」(一九五〇年)、人種別の居住区を定め

し、異人種間の結婚を禁止する「離婚禁止法」(一九五〇年)、異人

種間の性的交渉を禁止する「背徳法」(一九五〇年)、さらに人種登

録を義務づける「人口登録法」(一九五〇年)、人種別の居住区を定め

し、異人種間の結婚を禁止する「離婚禁止法」(一九五〇年)、異人

種間の性的交渉を禁止する「背徳法」(一九五〇年)、さらに人種登

録を義務づける「人口登録法」(一九五〇年)、人種別の居住区を定め

し、異人種間の結婚を禁止する「離婚禁止法」(一九五〇年)、異人

種間の性的交渉を禁止する「背徳法」(一九五〇年)、さらに人種登

録を義務づける「人口登録法」(一九五〇年)、人種別の居住区を定め

し、異人種間の結婚を禁止する「離婚禁止法」(一九五〇年)、異人

種間の性的交渉を禁止する「背徳法」(一九五〇年)、さらに人種登

録を義務づける「人口登録法」(一九五〇年)、人種別の居住区を定め

し、異人種間の結婚を禁止する「離婚禁止法」(一九五〇年)、異人

種間の性的交渉を禁止する「背徳法」(一九五〇年)、さらに人種登

録を義務づける「人口登録法」(一九五〇年)、人種別の居住区を定め

し、異人種間の結婚を禁止する「離婚禁止法」(一九五〇年)、異人

種間の性的交渉を禁止する「背徳法」(一九五〇年)、さらに人種登

録を義務づける「人口登録法」(一九五〇年)、人種別の居住区を定め

し、異人種間の結婚を禁止する「離婚禁止法」(一九五〇年)、異人

種間の性的交渉を禁止する「背徳法」(一九五〇年)、さらに人種登

録を義務づける「人口登録法」(一九五〇年)、人種別の居住区を定め

し、異人種間の結婚を禁止する「離婚禁止法」(一九五〇年)、異人

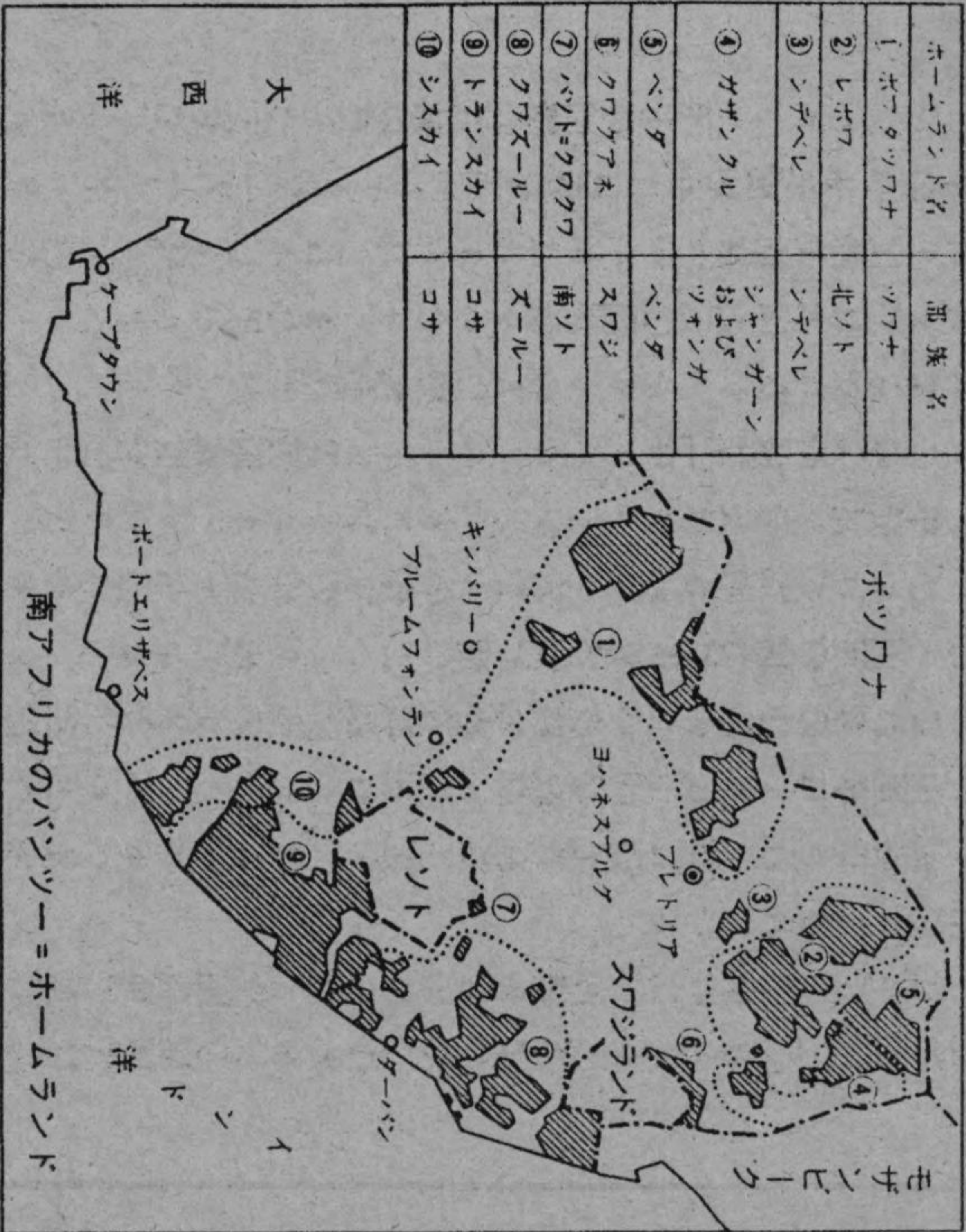
種間の性的交渉を禁止する「背徳法」(一九五〇年)、さらに人種登

録を義務づける「人口登録法」(一九五〇年)、人種別の居住区を定め

し、異人種間の結婚を禁止する「離婚禁止法」(一九五〇年)、異人

種間の性的交渉を禁止する「背徳法」(一九五〇年)、さらに人種登

録を義務づける「人口登録法」(一九五〇年)、人種別の居住区を定め



頭は「離婚禁止法」「背徳法」「パス法」など一部のアパルトヘイト法を廃止したが、アフリカ人の参政権、集団地域法、人口

登録法など白人支配存続に必要な法律は依然残している。

七八年首相の座にいた現P・W・ボータは、内外の動きに

対応するため「全面戦略」を掲げ、アフリカ人に対しては、

「分離発展政策」の堅持、カラード、インド人に対しては白人側

に取りこみ、改憲して八四年に人種別三院制議會を発足させ自

らは大統領に就任した。これを契機にアフリカ人を中心とする

反政府運動が高まり、八五年に非常事態宣言を発令して弾圧し

たため国際社会はそれを非難し、経済制裁に踏み切った。大統領

は大統領に就任した。これを契機にアフリカ人を中心とする

反政府運動が高まり、八五年に非常事態宣言を発令して弾圧し

たため国際社会はそれを非難し、経済制裁に踏み切った。大統領

は大統領に就任した。これを契機にアフリカ人を中心とする

反政府運動が高まり、八五年に非常事態宣言を発令して弾圧し

たため国際社会はそれを非難し、経済制裁に踏み切った。大統領

は大統領に就任した。これを契機にアフリカ人を中心とする

反政府運動が高まり、八五年に非常事態宣言を発令して弾圧し

たため国際社会はそれを非難し、経済制裁に踏み切った。大統領

は大統領に就任した。これを契機にアフリカ人を中心とする

反政府運動が高まり、八五年に非常事態宣言を発令して弾圧し

たため国際社会はそれを非難し、経済制裁に踏み切った。大統領

は大統領に就任した。これを契機にアフリカ人を中心とする

反政府運動が高まり、八五年に非常事態宣言を発令して弾圧し

たため国際社会はそれを非難し、経済制裁に踏み切った。大統領

は大統領に就任した。これを契機にアフリカ人を中心とする

反政府運動が高まり、八五年に非常事態宣言を発令して弾圧し

たため国際社会はそれを非難し、経済制裁に踏み切った。大統領

は大統領に就任した。これを契機にアフリカ人を中心とする

反政府運動が高まり、八五年に非常事態宣言を発令して弾圧し

たため国際社会はそれを非難し、経済制裁に踏み切った。大統領

「ホスト・アパルトヘイト」

(マニフェスト歓迎日本を自国編 日本評論社)

2 アパルトヘイト、何が変わり、何が変わらないのか

● アパルトヘイト
終結宣言

「人類への犯罪」と呼ばれる南アフリカのアパルトヘイト。それにいま、幕が下ろされようとしている。だが、数多くの問題は先送りにされたままだ。

一九九一年六月一七日、最後まで残っていたアパルトヘイト根幹法の一つ「人口登録法」の廃止が決定した。この「人口登録法」は出生した子供を、白人・黒人・アジア人・カラードという人種別に分類するもので、この世に生まれ出た赤ん坊が真つ先に出会うアパルトヘイト法だった。「アパルトヘイト」とは、全人口の五分の一にも満たない少数白人が、すべての権限・権益を独占するために、肌の色を基準にして法律により差別を定めた社会システム総体を指す。この「人口登録法」はまさしくアパルトヘイトの根幹と言うべき法律だった。

アパルトヘイトを構成する法律は三五〇以上にも及ぶ。しかし、そのなかでもアパルトヘイトの屋台骨を支えていたのがつぎの四つの法律である。

- ①原住民土地法(一九一三、三六) 国土の八七%を白人が独占、黒人は使用言語別に、残りの一三%の不毛な土地に押し込められる。
- ②集団地域法(一九五〇) 都市周辺に人種ごとに生活する地域を指定したもの。
- ③人口登録法(一九五〇)
- ④ベンツール教育法(一九五三) 教育を人種ごとのカリキュラム・施設で行ない、黒人には白人よりも劣等な教育しか施さない。

これらは「根幹四法」と呼ばれてきたが、人種ごとの教育を規定していた法律は一九九一年はじめに、原住民土地法と集団地域法は同年六月五日にそれぞれ廃止が決定していた。そして人口登録法の廃止決定により、根幹法はすべて姿を消すことになった。デクラーク大統領は人口登録法の廃止に際し、「アパルトヘイトは過去のものになった」と演説した。しかし、黒人たちの評価は厳しい。「法」としてのアパルトヘイトは解消したとしても、彼ら黒人たちの暮らしは「アパルトヘイト」下とまったく変わっていないからだ。そして、黒人たちにはいまだに参政権はない。

● したたかな政治家
デクラーク

一九八九年九月に就任したデクラーク大統領は、たしかにつぎつぎと改革路線を押し進めてきた。

就任まもなくの一九八九年十一月、デクラークは海岸、公園などの利用を全人種に開放すると発表、また、ヨーロッパ歴訪中の一九九〇年五月には、公立病院の人種別規定の廃止、教育制度

- ③ 一本化に踏み切る方針を出した。六月に入つて、一九八六年以来布告されていた「非常事態宣言」を、ナタール州を除いて解除すると発表。公園、図書館などの公共施設の人種別利用を定めた「分離施設法」の廃止も、一〇五対三八で白人議会で可決された。

しかし、これらの「改革」は、国内のアパルトヘイトを維持しようとする勢力を極端に刺激しないようにしつつ、国際社会には、経済制裁解除をにらんで改革が進んでいるように印象づけるという、綱渡りのものだった。実際、人種別の施設利用制限を定めたさまざまな法律は、もつとも目につきやすい差別だがアパルトヘイトの根幹法とは言えず、「小さな(プチ)アパルトヘイト」として分類されてきたものだった。一九八九年、南ア中に吹き荒れた不服従運動で、すでにいくつかの病院や海岸も開放されていたし、ジョハネスバークなどの大都市では一九八五年以来、

バスなどの乗り物の人種制限はなくなっていた。バスの人種別利用制限を廃止したところで、「集団地域法」によつて黒人、白人の居住地域が違ふのだから、実質的にバスは「黒人専用」「白人専用」になってしまう。一九九〇年度中のデクラークの改革路線は、根本的なものにはまったく手をつけず表面的なものに終始していた。

一九九一年に入ってから、先の「根幹四法」の廃止をはじめ、思い切った政策を打ち出してきたが、それは国際世論の「制裁解除」のタイミングと歩調を合わせたものだった。

官僚出身のデクラークの政治基盤は、軍事・警察国家である南アではきわめて弱いものである。前大統領ボタは国防出身、その前のフルゲールトは警察出身、また、与党国民党のなかにも両者の影響を受けたものが少なからず存在していた。このためデクラークは「経済制裁解除」を国際社会から引き出し、それをバネにして国内での地盤を固めた上で、重要な問題に着手していったのである。というのも、「経済制裁」を解除するか否かは、デクラークとマンデラ、いずれを国際世論が南アの改革過程において評価しているかをはかる、リトマス試験紙となっていたからである。

1989. 2.2	デクラーク国民党首就任	デクラーク国民党首就任
9.6	国民党、総選挙で過半数維持	国民党、総選挙で過半数維持
9.20	デクラーク大統領就任	デクラーク大統領就任
10.15	シスルラ8人のANC幹部を釈放	シスルラ8人のANC幹部を釈放
1990. 2.2	デクラーク大統領、ANC、PACなどの活動禁止を解除	デクラーク大統領、ANC、PACなどの活動禁止を解除
2.11	マンデラ釈放	マンデラ釈放
4.5	デクラーク、マンデラ初の公式会談	デクラーク、マンデラ初の公式会談
5.2-4	第1回予備交渉	第1回予備交渉
6.7	ナタール州を除いて非常事態宣言を解除	ナタール州を除いて非常事態宣言を解除
8.31	国民党の党員資格、全人種に開放を宣言	国民党の党員資格、全人種に開放を宣言
10.15	分離施設法廃止	分離施設法廃止
10.18	ナタール州の非常事態宣言も解除	ナタール州の非常事態宣言も解除
1991. 1.10	白人校の幾つかが全人種に開放される	白人校の幾つかが全人種に開放される
2.1	南ア国会開会。デクラーク、土地二法の廃止を宣言	南ア国会開会。デクラーク、土地二法の廃止を宣言
2.14	新生児の人種登録を廃止	新生児の人種登録を廃止
3.7	政治亡命者の集団帰国開始	政治亡命者の集団帰国開始
3.12	土地改革白書を発表	土地改革白書を発表
5.3	国内治安法の廃止、議会で決定	国内治安法の廃止、議会で決定
6.17	人口登録法の廃止、議会で決定	人口登録法の廃止、議会で決定
6.30	人口登録法、土地二法が公式に失効	人口登録法、土地二法が公式に失効
7.30	マラン国防相、フロックス法秩序相の更迭を発表	マラン国防相、フロックス法秩序相の更迭を発表

表4-5 デクラークの「改革路線」



●読書案内

「アパルトヘイトの彼方に人間が輝く」
——日本人に何が出来るか——より
刊行年順

■アパルトヘイトの実態と歴史を知るために

- ▽「南ア共和国の内幕—最後の白人要塞」伊藤政孝著 中公新書 一九七一年
- ▽「アパルトヘイト—文書・記録による現代南アフリカの研究」E.H.ブルークス著 鈴木二郎訳 未来社 一九七四年
- ▽「アパルトヘイト、なぜ?—南アの実情、歴史、そして私たち」篠田豊著 岩波ブックレット 一九八五年
- ▽「南アフリカの内側—崩れゆくアパルトヘイト」伊高浩昭著 サイマル出版会 一九八五年
- ▽「南アフリカ—アパルトヘイト体制の行方」林晃史編 アジア経済研究所 一九八七年 アジア経済研究所のアパルトヘイト調査・研究レポート
- ▽「アパルトヘイト—南アフリカの現実」日本AALA連帯委員会編 新日本出版社 一九八七年 執筆：片岡幸彦、伊部政之、川端正久、北島義信、北仁人、家正治

- ▽「ブラック・アンド・ゴールド 国際ビジネスを揺がす南アフリカ」アンソニー・サンアソン著 仙名紀訳 早川書房 一九八七年
- ▽「アパルトヘイト白書—英連邦調査団報告」英連邦賢人調査団 笹生博夫ほか訳 現代企画室 一九八七年
- ▽「南アフリカのアパルトヘイト」M.K.エバンス著 岩田隆史監訳 佑学社 一九八八年
- ▽「AMANDLA」アパルトヘイト廃止をめざす南ア人民支援連帯基金編 一九八八年
- ▽「南ア—アパルトヘイト共和国」吉田ルイ子著「アパルトヘイト解説」林晃史 大月書店 一九八九年
- ▽「まんが アパルトヘイトの歴史」IDAF著 (社)日本ユネスコ連盟・くぼたのぞみ訳 日本評論社 一九八九年
- ▽「アパルトヘイト 制度と実態 一問一答」R.オモンド著 斎藤憲司訳 岩波書店 一九八九年
- ▽「アパルトヘイト問題入門」ドナルド・ウッズ

- 著/マイク・ポストツック 天笠啓祐・楠瀬佳子訳 第三書館 一九九〇年
- アパルトヘイトと日本の関係
- ▽「ハンドブック—アパルトヘイトと日本」雑誌「世界」一九八八年九月
- ▽「南アフリカと日本—関係の歴史・構造・課題」森川純著 同文館 一九八八年
- ▽「アパルトヘイトと日本」楠原彰著 亜紀書房 一九八八年
- 南アの闘いの中の人たちについて
- ▽「南アフリカに自由を—荒れ野に叫ぶ声」デズモンド・ツツ著 桃井健司・近藤和子訳 サイマル出版会 一九八六年
- ▽「アパルトヘイトに抗して」A.ブーサク著 君島洋三郎訳 日本基督教団出版局 一九八六年
- ▽「見えない南アフリカを見る」アンドレ・プリンク著 奥野保男・芝實訳 晶文社 一九八七年
- ▽「わが魂はネルソンとともに」ウイニー・マンデラ 阿部登・村山淳彦訳 新日本出版社 一九八七年

▽「俺は書きたいことを書く—ステイヴ・ビコは語る」ステイヴ・ビコ著 峯陽一/前田礼/神野明訳 現代企画室 一九八八年

▽「二匹の犬と自由—アパルトヘイト下の子供たち」南アフリカ共和国の子供たちほか著 現代企画室 一九八八年

▽「この国 この男—ネルソン・マンデラに捧げられた—四のオマージュ」スーザン・ソントグ/ジャック・デリダ/モーリス・ブランショほか ユニテ 一九八九年

▽「アパルトヘイトの白人たち」松本仁一著 すずさわ書店 一九八九年

▽「ネルソン・マンデラ」メアリー・ベンソン著 阿部登・村山淳彦訳 新日本出版社 一九八九年

▽「アパルトヘイトの子どもたち—ぼくたちは怒っている」吉田ルイ子著 ポプラ社 一九九〇年- ▽「ネルソン・マンデラ—こぶしは希望よりも高く」フアティマ・メーア著 楠瀬佳子/神野明/砂野幸彦/前田礼/峯陽一/元木淳子訳 明石書店

一九九〇年

■南アフリカの文化について

- ▽「南アフリカの民話」B.アデーマ編/デイロン夫妻絵 掛川恭子訳 偕成社 一九八二年
- ▽「アパルトヘイト否!—国際美術展 カタログ」同美術展実行委員会編 高橋武智他訳 現代企画室 一九八八年
- ▽「草原に雨は降る」シェイラ・ゴードン著 犬飼和雄訳 ぬぶん児童図書出版 一九八九年
- ▽「カマキリと月—南アの8つの話」マーグリット・ポーランド著 福音館書店 一九八九年
- ▽「アマンドラ—ソエト蜂起の物語」ミリアム・トラディ著 佐竹純子訳 現代企画室 一九八九年
- ▽「アマンドラ—南アフリカからのメッセージ」ジョン・ス・グワンクワ (聞き手) 片岡幸彦 かもがわブックレット 一九九〇年
- ▽「アマンドラ—南アフリカの生活と文化」ANNC東京事務所 一九九〇年
- ▽「アフリカ抱擁—文化とアパルトヘイト」土屋哲

著 サイマル出版会 一九九〇年

■アフリカの中のアパルトヘイト

- ▽「南アフリカの核兵器開発」D.スミス著 アフリカ行動委員会 一九八二年
- ▽「第三世界を知る3 アフリカの世界」江口朴郎・岡倉古志郎・鈴木正四監修 大月書店 一九八四年
- ▽「苦悶するアフリカ」篠田豊著 岩波新書 一九八五年
- ▽「現代アフリカの悩み」小倉充夫著 NHKブックス 一九八六年
- ▽「アフリカの飢えとアパルトヘイト」楠原彰著 亜紀書房 一九八七年
- ▽「アフリカを知る事典」伊谷純一郎ほか監修 平凡社 一九八九年
- ▽「わたしたちのナミビア—ナミビアプロジェクトによる社会科テキスト」ヘニングメルバー編 ナミビア独立支援キャンペーン・京都訳 現代企画室 一九九〇年



南アフリカ
特集正念場を迎えた
南ア社会と世界

日本とアパルトヘイト

北沢 洋子 国際問題評論家

南アフリカの黒人指導者ネルソン・マンデラが来日するはこびとなった。10月28日の夕べには東京・下高井戸の日大文理学部大講堂で歓迎集会在企画されている。マンデラは、今年2月に28年という長い獄中生活から自由の身となったばかりである。70を越す老齢の身でありながら、白人政府との対話を始め、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカを精力的に訪問し、各地で数十万人規模の熱狂的な歓迎デモを受けている。

マンデラは、今日、白人政権と交渉できる黒人側の唯一の希望の星であるばかりでなく、人種差別と闘う世界の指導者とみなされている。このマンデラの釈放を待ち取ったのは、いうまでもなく南アフリカの黒人の闘いであった。同時にここ数年間に高まってきたアメリカ、ヨーロッパにおける反アパルトヘイト運動に負うところが大きい。

反アパルトヘイト闘争

南アフリカで反アパルトヘイト闘争が大きく燃え上がったのは、1984年9月、黒人居住区ではじまったデモと金鉱でのストであった。居住区では政府の家賃値上げ反対のデモがきっかけであった。ちなみに黒人は都市の中では居住区に閉じ込められている。そこでは黒人は自分の家を持つことを許されず、政府の貸し家に入らざるをえないという背景がある。ここでの黒人デモの特徴は、まず子どもと女性が中心になっているところにある。そのため、このデモの鎮圧に出動した白人警官が無差別に発砲して、小さな子どもが射殺される、あるいは8歳の子どもが「国家転覆の罪」で起訴されるという異常な事件が発生した。これは黒人の新たな怒りを誘い、たちまち反乱は全土化していった。

第二の特徴は、反乱の持続性にある。子どもと女性がデモの主体となっているというところは、指導者不在の、いわば自然発生的な闘争である。いくら逮捕者を出してもいっこうに鎮静化する様子を見えていない。

また、金鉱での黒人労働者が初めて「合法」ストを行った。南アフリカでは黒人労働者に交渉権は認められていない。したがって、それ以前に行われたストは「山猫スト」だとして厳しい弾圧を受けてきた。だがここで黒人労働者はついに金鉱主を交渉の場に座らせることに成功した。1984年9月のストには34万人が参加し、24パーセントという高い賃上げを獲得した。以来毎年、金鉱での賃上げストが続いている。金鉱が南アフリカ経済の根幹であるところから、これはアパルトヘイトに大きな打撃を与えている。

南アフリカの黒人の闘争の特徴は、単に黒人勢力が白人政権を優勢に追い込んだばかりでなく、国際的にも大きな影響を及ぼした点にある。実際、アメリカやヨーロッパの新聞やテレビは連日のように南アフリカの黒人反乱の様態を報道した。南アフリカに大きな権益を持ち、アパルトヘイトを支えてきた国々で、大規模な反アパルトヘイト運動が起こった。人びとは自国の企業や銀行に対して、南アフリカからの投資の撤退を要求した。そして、ゼネラル・モーターズ、IBMなどの大企業、シティ、パークレイズといった大銀行が次々と撤退していった。やがて、アメリカ、ヨーロッパでの対南アフリカの経済制裁の動きが高まった。スウェーデンのように全面的に貿易を停止した国もある。



南アフリカの白人政権は、このような内外からの圧力をかわすために、非常事態宣言の撤廃、アパルトヘイトの一部修正、マンデラの釈放に踏み切った。そして、マンデラを代表とする黒人勢力との対話が開始されたのであった。

日本の立場

私たちはここで、このような国際的な反アパルトヘイトの風潮の中で、日本がどのような役割を果たしているかを明らかにしなければならない。

ひと口に言って、日本は対南アフリカ経済制裁に参加しないばかりか、アメリカ、ヨーロッパが手を引いていった後に、かえって進出しているのである。たとえば1987年には日本の南アフリカとの貿易額はアメリカを抜いて世界第1位となった。ついに国連総会は日本をアパルトヘイトの加担者として、名指しの非難決議を行ったのであった。

しかもこの貿易の中身を検討すると、さらに重大な問題を数多く含んでいる。たとえば、1986年には、日本は南アフリカから、とうもろこしの輸入をその前年に比べて16倍という驚異的な伸びを記録している。南アフリカのとうもろこしは良質で、飼料用ではなく、コーンステーキに加工され、ビールの原料になっている。「ドライ」だ「生」だといって、日本のビールの消費量が年々伸びているのだが、南アフリカでは本来、このとうもろこしは黒人の主食なのである。

すでに1,000万人もの黒人家族が、白人政権によって都市の黒人居住区から追い立てられ、「ホームランド」なる荒れたへき地に押し込められている。ここでは飢餓が蔓延(まんえん)しており、子どもは栄養失調のために5歳になるまでに半分が死んでい

(1987年)

昨年9月のデクラーク政権誕生以来、南アフリカは大きく動き始めた。多数派の黒人の政治的、経済的、社会的諸権利を40年以上にわたって奪い続けてきたアパルトヘイト政策の壁は完全につき崩すことが出来るのか。新憲法制定に向けた南ア政府と黒人解放組織アフリカ民族会議(ANC)との交渉の行方は? 日本の役割は? —編集部

から密輸せざるをえないのである。この武器が直接黒人弾圧に使用されていることはいうまでもない。また、現在南アフリカの与党である国民党は、農園主やブアー・ホワイトに支持基盤を置いている。彼らは政治権力を持っているが経済力はない。そこで彼らがブルジョワ化する道は国営企業を育成することである。すでに南アフリカの鉄鋼、鉄道、航空、石炭液化、電力、原子力、兵器といった基幹産業は国営化されている。南アフリカはアパルトヘイトのため先進工業国から経済援助を受けることができない。また銀行からの融資も、反アパルトヘイト運動の攻撃を受けて困難になっている。そこで金輸出の収益金が重要な資金源となっているのである。

貿易がアパルトヘイトを支持

以上のことで明らかなように、金はアパルトヘイトの支柱のひとつになっている。そして日本はこの金を大量に輸入することによって、アパルトヘイトの最大の加担者となっているのである。日本政府は国連での名指しの非難を受けた翌年、南アフリカ産の金の輸入先を、国際市場であるロンドンとチューリヒのある国、イギリスとスイスに振り替えた。その結果、南アフリカとの貿易額は減って、日本は西独に次ぐ第2位に転落した。政府はこれで国際的非難をかわすことができたと考えているが、金を産出しないイギリスやスイスから買っているという奇妙なことになってしまった。

ブラチナやダイヤモンドについても同じことがいえる。最近、輸入が急増したこれらの品目は、主として装飾用に使われ、あるいは金のように投機商品となっている。一方では、「日本は南アフリカからのレアメタル(稀金属)がなければやっていけない」という主張がある。これは、アメリカがかつて、南アフリカがインド洋の入り口のひとつになっていたところから、戦略的重要性を主張していたのを、1980年代に入ってから軌道修正して、「唯一のレアメタル供給国」であることを強調しはじめた時期に、日本でも出てきた説である。

ここでレアメタルの代表であるクロム鉱について述べる。かつて、日本は国連安保理が「対ロデーシア経済制裁」を行っていたころ、この国からのクロム鉱を大量に密輸していた。国連からしばしばその事実を追及されても、まともに答えることをしなかった。ところが、1980年ロデーシアの白人政権が倒れ、ジンバブエという国名で黒人政権が誕生した後は、日本はロデーシアからのクロム鉱の輸入を止め、全量南アフリカ産に切り替えた。密輸時代、ロデーシアのクロム鉱の品質が世界一であることを、その言い訳にしていたにもかかわらずである。つまり、日本の「南アフリカ産レアメタル依存説」はこの国が白人支配の国だということから来ている。つまり商売の上にも人種差別が存在するというものを物語っているのである。

マンデラの来日を機に、日本では反アパルトヘイトの大きな運動をつくり出さねばならない。白人政権は黒人との対話を開始したといっても、黒人が要求している「ひとり一票制」を受け入れる気は全く持っていない。国際社会が白人政権に圧力をかけられる唯一の平和的手段である経済制裁を、今後さらに強めなければならない。

きたざわ ようこ: 1959-67年、アジア・アフリカ人民連帯機構カイロ国際書記局に勤務。たびたび国連総会、理事会公聴会などにアフリカ問題で出席。現在、アジア太平洋資料センター所属。著書に「日本企業の海外進出」「私のなかのアフリカ」など。

これまでの動き

(色部分=反アパルトヘイト)
(白地部分=アパルトヘイト)

- 1948 アパルトヘイト政策を掲げる国民党政権成立、人種差別の諸政策の法制化始まる
- 1950 人種別集団地域法制定
- 1959 「全面的アパルトヘイト」構想の核として、パンツース自治促進法制定
- 1960 パス法に抗議するパン・アフリカニスト会議(PAC)が組織するデモに警官隊が発砲、69人を射殺(シャープビル虐殺事件)。アフリカ民族会議(ANC)、PACが非合法化される
- 1961 南ア、英連邦から脱退、共和国になる。日本人、「名誉白人」と認められる
- 1962 ネルソン・マンデラ氏逮捕される
- 1963 ウォルター・シスル氏に残るANC指導者一斉逮捕
- 1964 マンデラ、シスル氏に終身刑
- 1969 南ア学生機構(SASO)指導者はスティープ・ビコ氏が結成され、黒人意識運動始まる。ANC、武力闘争を宣言
- 1971 パンツース・ホームランド制憲法が制定され、パンツースタン政策推進される
- 1976 ソウェト蜂(ろう)起、575人以上の若者が射殺される
- 1977 黒人意識運動指導者スティープ・ビコ氏獄中死。黒人意識運動団体(2新聞、18団体)の非合法化、黒人指導者47人逮捕
- 1978 P・W・ボタ政権成立
- 1979 南ア政府、ホームランドは「独立国」と宣言
- 1982 南ア軍、レソトの難民キャンプを攻撃しANC幹部27人殺害
- 1983 新憲法案に反対し、統一民主戦線(UDF)結成。黒人の大規模な反政府暴動が起こり始め、以後3年間に黒人の死者2,500人以上
- 1984 人種別三院制議会成立、カラード(混血)、インド人に参政権(黒人は除外)。非暴力による反アパルトヘイト運動の指導者ツツ主教ノーベル平和賞受賞
- 1985 就労差別法改革、背徳法・離婚禁止法廃止、黒人の土地所有認可。非常事態宣言発令、南ア学生会議(COSAS)非合法化
- 1986 非常事態宣言南ア全土に再発令、1,000人以上の活動家を拘置、3万人以上を拘束。パス法廃止。米GM、GE、IBM、エクソン、コカ・コーラの各社、英パークレイズ銀行など南アから撤退
- 1987 全国鉱山労働者組合(NUM)史上最大の3週間スト決行。日本の対南ア貿易世界第1位に



- 1988 UDFなど17団体に活動禁止命令。143人の白人青年、アパルトヘイトを支えるとして兵役を拒否、南ア政府は兵役拒否運動の活動を禁止。国連でアパルトヘイト非難決議採択、前年対南ア貿易1位の日本を非難
- 1989
 - 9月 総選挙、300万人の黒人が在宅ストなど抗議行動、2,000人が逮捕され、60人以上死亡。F・W・デクラーク政権成立
 - 10月 シスル氏など黒人政治犯8人釈放される。ソウェトでANCの大集会開催、警察は黙認
- 1990
 - 2月 ANC、PACが30年ぶりに合法化される。マンデラ氏、27年ぶりに釈放される
 - 3月 マンデラ氏、ANC副議長に就任
 - 8月 ANC、武力闘争放棄を宣言。ヨハネスブルグ市評議会、居住区分離の集団地域法廃止を国に促すことを決議。デクラーク大統領、国民党を全人種に開放することを発表
 - 9月 白人公立校を全人種に開放することを発表
 - 10月 公共施設(人種別)分離法廃止。警官に過度の権限を与える非常事態宣言(1986年発令)全国的に解除



南アフリカ特集

Why Nelson Mandela Matters

By Micheline Tusenius

いまや反アパルトヘイト運動の象徴的存在となったネルソン・マンデラ氏の今回の来日を、南ア共和国と経済的に強いつながりを持つ日本はどのように受け止めたらいのだろうか。地球上から人種差別をなくすうえで重要な役割をもつ南アの黒人解放運動とそれを率いるマンデラ氏について、オランダ系南アフリカ人(アフリカーナー)である筆者が語る。

He could be your grandfather or mine, so familiar and comforting are his warm, kind smile and gently sparkling eyes. Yet the manner of his calm dignity and thoughtful eloquence hint that this man is different.

Indeed, this unassuming elderly man with the beckoning eyes is no ordinary grandfather. He is a man of exceptional stature, integrity and courage. He is Nelson Mandela, one of the formidable symbols of our time.

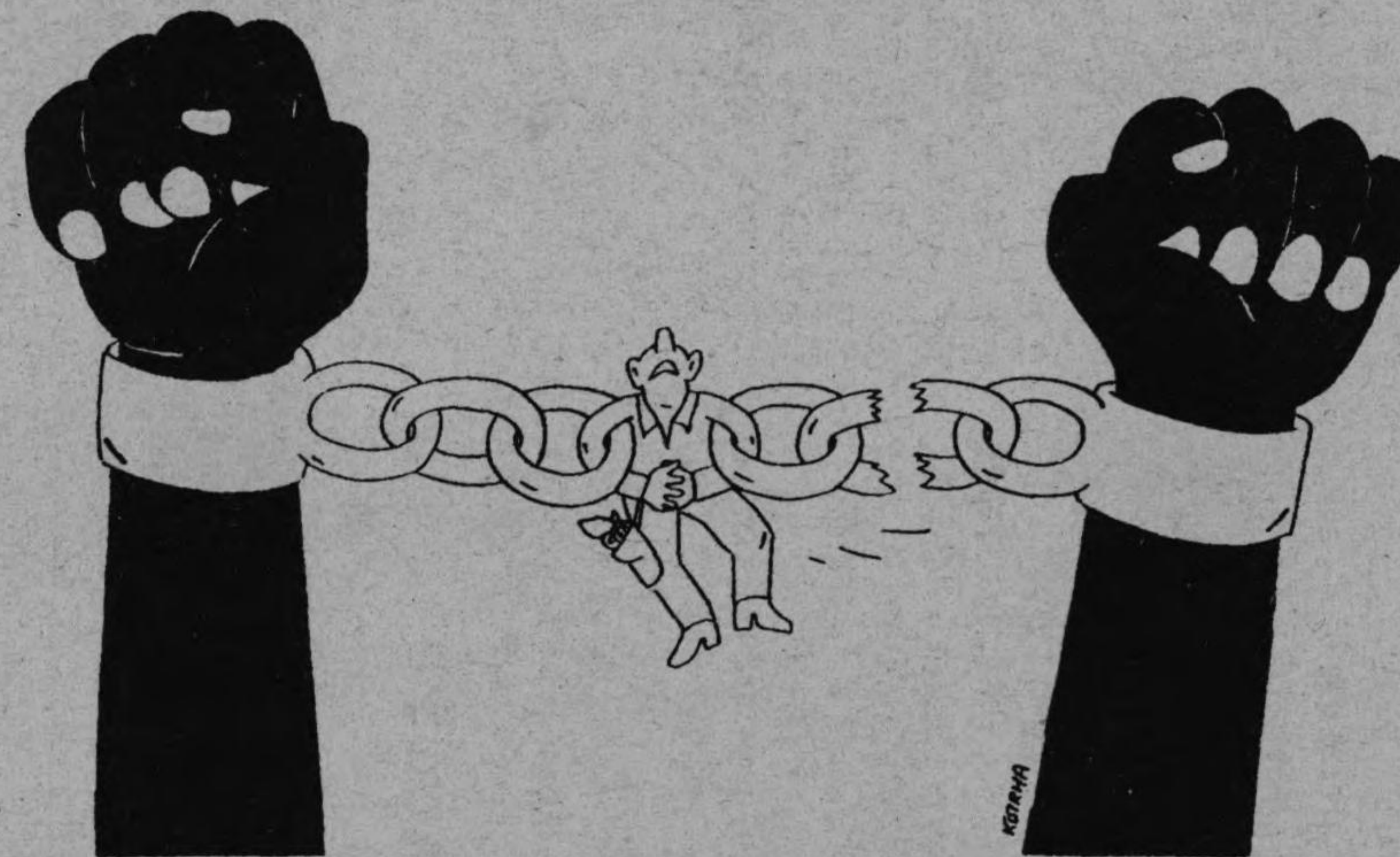
Nelson Mandela, the remarkable South African who visits Japan in October, was the world's most famous political prisoner until February this year.

He had been sentenced to life imprisonment in 1962 by the white-led Nationalist government in South Africa for his activities in opposing the minority rule. But this February, after imprisoning him for 27 years, the South African government backed down and unconditionally released him.

Mandela has emerged from prison much more widely acclaimed than he was at the time of his imprisonment. His role now is crucial for South Africa's future. Today, he is an immensely powerful figure as well as a towering moral authority in a country fraught with ethical and moral compromise.

Mandela's personal triumph is

- had been...imprisonment 終身刑の判決を受けていた
- in opposing...rule 少数派である白人の支配に反対することにおける
- backed down 取り消した、譲歩した
- fraught with...compromise 倫理、道徳心の弱体化した。fraught with...「～に満ちた」
- principle and cause 原則と大義



L'Uboimir Kotrha (Czechoslovakia) from the United Nations Center Against Apartheid, Selection of Anti-Apartheid Cartoons From Around the World (New York, 1989)

enormous. His steadfast commitment to principle and cause—at great personal cost and sacrifice—is tremendously inspiring. Just as much so is his clearly sincere lack of bitterness toward his jailers over his lost 27 years.

He represents dedication to principle and seriousness of purpose like few others. He did not compromise himself or the cause of black South Africa over the course of nearly three decades. Indeed, as he always insisted it would, his release came unconditionally.

Release Was Inevitable

On Feb. 11, 1990, the day of his dramatic release and at his first public address, Mandela lamented that little had changed during the time of his incarceration. Black South Africans still were not free from white minority rule. He urged them to wait

no longer to achieve this goal.

But the processes of national reconciliation and constitution writing could not move forward while he and his colleagues remained incarcerated. Neither could there be progress while the bans endured on various organizations that had actively opposed white rule over the years. These groups included the African National Congress (ANC), the organization to which Mandela has devoted most of his life.

And so, by releasing Mandela and unbanning the ANC and other groups this February, the white-led government has certainly unjammed the systemic inertia of the last years.

With these actions, the government has also conceded the ultimate unworkability and bankruptcy of its 42-year old racially based policies. Indeed, it states its desire to enter into full-scale negotiations with the

- unjammed...last years 近年動きがなかった体制を動かした。inertia「不活性」
- keep any deals...elements 取り決められた政策(協定)が非常に攻撃的な人々に打ち壊されないようにする。to strike「協定などを結ぶ、取り決める」
- at the least...rule せめて、多数派の黒人による支配をマンデラが実現させてくれることを期待している

ネルソン・マンデラ(Nelson Rolihlahla Mandela): 1918年生まれ。南アフリカの黒人解放組織・アフリカ民族会議(ANC)副議長(90年3月就任)。44年ANC青年同盟創設に活躍。52年非白人初の弁護士事務所をヨハネスブルグに開設。62年逮捕され、64年反逆罪で終身判決を受ける。86年政府による条件付き釈放の提案を拒否。90年2月無条件釈放。アパルトヘイト全廃を訴えて、アメリカ・ヨーロッパなど各国を意欲的に訪問している。

ANC and others on a new constitution for South Africa.

Now Mandela is the focus of enormous expectations on all sides of South African society. The Nationalist government is counting on his legendary reputation to draw skeptical blacks to the negotiating table, and to keep them committed to the process and its products. It particularly hopes that he will be able to keep any deals struck from unraveling at the hands of the most militant elements. Generally, white South Africans hope that Mandela's authoritative influence will be a moderating one.

On the other hand, black South Africans at the least expect him to deliver black majority rule. They also see him as a unifier and look to him to fix the deep political and other divisions currently—and violently—pulling their communities apart. In addition, they expect him to achieve for them better housing, schools and other qualitative improvements in their lives.

Nelson Mandela will have a lot on his mind while he is in Japan. Indeed, will this distinguished, grandfatherly figure be able to reconcile and balance all the competing demands and expectations that await him in South Africa? Can Japan help him do so?

Micheline Tusenius: Born in Johannesburg but a more recent resident of Cape Town, South Africa, the author is presently living in Taipei, Taiwan. She is a graduate of Stellenbosch University in South Africa and Georgetown University in the United States.